レミリアととある男の物語

通りすがりの炎雷神の子

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは完全に自己満足で書いている短編集です

目次

本当の鋤羅 ―― 1
東方紅恋記 ―― 5
東方紅恋記第二弾 ―― 11
天子の本当の気持ち ―― 20
天子の本当の気持ち2 ―― 26
少女達の知らない鋤羅 ―― 29
鋤羅とレミリアの秘密の勉強会（天子とこころと文も出ます） 33
レミリアと鋤羅のとある一日 ―― 36
レミリアの夢の中 ―― 39
鋤羅の一生傷と花粉症 ―― 42
エイプリルフール ―― 46
番外編＃1 ―― 50
細菌の塊と病弱夫婦（？） ―― 53
番外編＃2 ―― 56
竜の構え ―― 60
友人からのリクエスト ―― 64
鋤羅の戦い方 ―― 69
いざ乗り込み！ ―― 73

本当の鋤羅

誤字脱字の可能性大
その時はごめんなさい許してください
設定
天子とこころと文はレミリアに雇われている鋤羅の稽古をつける人

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

咲夜「お嬢様、館内に賞金首１８００万の極悪な化け物が侵入しました」
レミリア「侵入って美鈴は？」
咲夜「残念ながら・・・やられてしまいました」
レミリア「そう・・・鋤羅を呼んできてくれる」
咲夜「かしこまりました」
鋤羅「どうしたのレミィ？」
レミリア「館内に化け物が侵入したわ
だから倒してきて欲しいの」
鋤羅「そんなの楽勝だぜ」
ーー少年移動中ーー
極悪人「おいここのボスを出せ」
鋤羅「待たせたなボスなら今登場した」
極悪人「お前がここのボスか
俺はここの館を制圧しに来た俺とこの館をかけて勝負・・!?」
ズバッ（斬撃音）
鋤羅「あぁ避けたか
当たったと思ったんだけどな」
極悪人「お前俺を怒らせたな覚悟しろ
殺戮『無限の矢霧』
斬跳『跳躍斬撃』」
ズガッゴスッ（跳躍斬撃と無限の矢霧の攻撃音）
鋤羅「グアッゲホッ」（吐血）

極悪人「なんだよボスって言うから強いと思ったらその程度かよ
まぁいいここの制圧は最後にしてまた数日後くるとするか」
ーー数時間後ーー
天子「無様ね鋤羅」
鋤羅「天子・・・俺は初めて負けた
もう俺にはレミリアを守る力も無ければ資格もない」
天子「・・・本当にそう思ってるの？」
鋤羅「思ってるよ」
天子「でも少なくともレミリア様は最後まで鋤羅の事を信じていたわよ
私はこれで失礼するわ。後はゆっくりレミリア様とお話ししなさい」
レミリア「・・・」
鋤羅「レミィ・・・もう俺は」
レミリア「貴方なんなの？なんでもう完全に敗北した感じになってるの？貴方はやられても何度でも立ち上がって最後には完全勝利をするんじゃないの
貴方は負けた事ないからそんな事なかったけどやられた時はそうするって言ってたじゃない！
貴方はもう私の知っている鋤羅とは違うわ鋤羅に似た誰かよ」
鋤羅「レミィ・・・俺は・・」
ーー少々移動中ーー
天子「レミリア様どこに行くんですか？」
レミリア「私の恋人をあんなのにした賞金首を倒しに行くわ」
文「そんな無茶です」
レミリア「鋤羅がいない今ボスは私よ」
ーー数日後ーー
極悪人「よしじゃあ正真正銘の制圧開始だな」
レミリア「貴方が誰かわ知らないけど引き下がってもらうわ」
極悪人「なんだお前？もしかして前にあったカスの恋人か何か？」
レミリア「黙れ貴方は私の愛する人を傷つけたそれだけで重罪よ」

極悪人「フンただのカスの恋人のお前に何ができる？
光滅『降り注ぐ闇槍」
聖絶『邪剣乱舞』」
レミリア「うっ、くっ何故苦しい？」
極悪人「今の槍と剣には妖怪をも倒す猛毒が塗ってあった
お前は攻撃どころか立ち上がる事すら出来ないさ」
ーー鋤羅のいる所ーー
鋤羅「レミィ・・・俺は負けたからこの館を守れない」
天子「いつまでそうしているつもり？
レミリア様なら鋤羅の仇とか言って化け物に挑み行ったわよ」
鋤羅「そうか」
こころ「なんなのそのリアクション
レミリア様は最後の最後まで貴方の事を恋人だと言っていたわよ」
鋤羅「レミィが俺を恋人って？」
文「そうですよ貴方を恋人だと言っていました」
鋤羅「・・・天子俺の刀どこにある？」
天子「ここにあるわ
はい」（刀を渡す）
鋤羅「・・・レミィを救いに行ってくる」
ーー少年移動中ーー
鋤羅「おい化け物」
極悪人「なんだ結局きたのか」
鋤羅「レミィを返せ」
極悪人「レミィ？あぁあの女か
悪いがそいつはもう始末した」
鋤羅「テメェ・・この野郎
炎雷獄『煉獄雷獄流星群・斬撃乱舞』」
極悪人「くっ、中々やるなだが・・・!?
どこだ？」
鋤羅「後ろだ
爆煉『爆撃ボルケーノ』」

極悪人「グアッ」
ドサッ（極悪人の倒れ伏す音）
鋤羅「・・・俺は最終的には館を守れた
でも最愛の人物レミィを守る事が出来なかった
クソっ、クソっいっそこのまま俺も死ねばよかったのに」
天子「そんな事はないわ
後レミリア様はちゃんと生きてるわ」
鋤羅「えっ？でも・・・」
こころ「たしかにレミリア様は化け物やられたでも殺されたわけではなく猛毒を浴びせられただけだったみたい多分レミリア様は猛毒で気絶していたみたい」
文「安心してくださいもう毒は完全に抜いておいたので
今は安静眠っています」
ーー数時間後ーー
レミリア「うっ、う～ん」
鋤羅「レミィ！」
レミリア「鋤羅？」
鋤羅「・・・ごめんレミィ俺負けた事ないからってただ一回負けただけなのにあんな弱気になって」
レミリア「いいのよ結局貴方は館ごと私とその住人達を守ってくれた
それだけでもわたしは嬉しいわ」
鋤羅「ありがとうレミィ、こころから聞いた最後の最後までこんな俺を恋人だと言ってくれたと」
レミリア「当然よあの時はあんな事言ったけど本当は最終的に私たちの事を守ってくれると信じていたから」
ーー終わりーー
初めて投稿するけど全然文字数足らないわまぁ自分は短編をいつか作ったて短編集作るつもりなんでこれくらいがちょうどいいですかね

東方紅恋記

鍬羅）ここに来て修復系不死の敵かよ
蕁麻麒）私は殺されるたび復活し復活するたびに強くなる
壊された箇所も数秒あれば修復できる
もはやお前に勝ち目はない
鍬羅）それはあくまで俺だけの場合の話だろ？
こっちは俺だけじゃないレミリアもフランもいる
蕁麻麒）それがどうした？
どちらにせよお前たちの絶望的な状況は変わらないだろう
鍬羅）だったらよかったな
レミリアフラン合体スペルだ！
レミリア）わかったわ
フラン）は～い
鍬羅）獄炎『煉獄ボルケーノ』
レミリア）神槍『スピア・ザ・グングニル』
フラン（禁忌『レーヴァテイン』
蕁麻麒）なんだ？
三人同時にスペルを使ってこの程度か？
この片腕程度すぐ修復・・ん？
なぜだなぜ右腕が修復されない
鍬羅）残念だったな
俺たち三人が使ったスペルには永久的に能力を封じ込めるものを構築しておいた
よってお前は今から永久的に復活も修復もできない
どうする？降参するなら今のうちにだぞ？
レミリア）いや、こいつここで殺しておきましょう仮に今こいつがここで降参してもまたいつ襲ってくるかわからないわ
それにこれ以上鍬羅に傷を負って欲しくないもの・・・
フラン）でもさお兄様にむやみに殺害させるのもよくないと思うよ
レミリア）それは・・そうだけど・・

それでも鍬羅に傷を負って欲しくないわ
フラン）お姉様もうここはお兄様に判断を任せよう
レミリア）そう、ね鍬羅こいつはどうするの？
鍬羅）そうだな？
レミリアの言いたいこともフランの言いたいことも両方わかるが、やはりこいつはここで始末しておくこれはレミリアの意見を尊重した結果じゃない
俺が始末すると決めたのはレミリアとフランにこれ以上こんな思いをさせたくないという考えから出た結論だ
雷神『雷槍流星群』
レミリア）やっと終わったのね
フラン）紅魔館に帰ったら咲夜のプリン食べたいな
鍬羅）俺は特にすることはないけどな
レミリア）だったら私の部屋に来なさい大事な話がある
ー少年、少女移動中ーー
鍬羅）それで大事な話ってなに？
レミリア）私達付き合って三年経つじゃない
鍬羅）もうそんなに経ったのか
レミリア）それでさ、私達そろそろ結婚したいなぁって思ってるの・・・
スッ（婚姻届を出す）
鍬羅）は？いやいや急にない言い出すのそれに承認は誰がするの？
フラン）承認は私だよ～
鍬羅）いやでも指輪とか買ってないし
レミリア）それは貴方が買って来てくれないかしら
鍬羅）指輪はいいけど結婚式の費用とか集まる人とかどうするの？
レミリア）もうそれはみんな知ってるわ
会場はここよ
鍬羅）待ってなんでみんな知ってるの
伝える暇なんかなかったよねなんで？
レミリア）咲夜に頼んだわ

鍬羅）そ、そうかとりあえず状況は整理できた。結婚かぁ～そういえば全然考えてなかったなぁ～
レミリア）早急に決めてくれないかしらそろそろ人が集まるから
鍬羅）よしわかった（婚姻届にサインをする）
ーー３０分後ーー
鍬羅）レミリア・スカーレットさん僕と結婚してください（ひざまづいて指輪を出す）
レミリア）もちろんです
ーー結婚して半年後ーー
レミリア「なんで私達また新婚旅行行ってないの？」
鍬羅「しかないだろ俺の仕事が忙しいせいなんだからさ」
レミリア「そうだけど・・・まともな休みとかないの？」
鍬羅「まともな休みね～あんまり取れそうにもないしな～」
レミリア「会社に交渉できないの？」
鍬羅「新婚旅行なんかで仕事は休めないしな」
レミリア「じゃあ夏休みとかないの？」
鍬羅「夏休みなら８月に五日間あるけどまだ先の方だぜ」（今は６月）
レミリア「仕方ないわねそれまで待つわ」
ーー２ヶ月後ーー
鍬羅「明日から仕事休みだ
新婚旅行どこ行きたい？」
レミリア「私海というところに行ってみたいわ」
鍬羅「海かぁ～こっちの世界じゃ普通すぎるななんかもっとこう・京都に行きたいとかないの？」
レミリア「正直貴方とならどこだっていいわ」
鍬羅「今この人すごい発言しました
う～んじゃあ祭りにでも行くか？」
レミリア「京都で祭りやってるの？」
鍬羅「明日と明後日やるらしい」
レミリア「じゃあそうしましょう♪」

ーー少年、少女京都に移動中ーー
鍬羅「着いたな」
レミリア「凄い人ね」
鍬羅「まぁ都会だからな」
レミリア「祭りに行くのはわかったけどそれまでどう時間を潰すのる」
鍬羅「適当にホテルで時間を潰すか、京都を適当にに回るかだな」
レミリア「じゃあせっかくだし適当に回りましょう」
ーー祭りの時間ーー
鍬羅「うわぁすげー人だかりだな」
レミリア「昼間より多いわね」
鍬羅「祭りだからな」
レミリア「まずお腹空いたわなにか　食べましょう」
羅「まずはあんばやしでも食うか」
レミリア「確かルーレットを回してもらえる個数が決まるのよね？」
鍬羅「そうだな俺は過去に何回か１２本を当てたことがあるからな任せろ」
ーー少年、少女ルーレット中ーー
鍬羅「嘘だろ・・・」
レミリア「別にいいじゃない」
鍬羅「いや、おかしいだろなんで俺が3本ではじめてのレミリアが１５本なの？」
レミリア「あらそんな事言っていいの？」
鍬羅「(し、しまった)」↑心の声
レミリア「そういう運命だったのよ♪」
鍬羅「(言われたよレミィの決め台詞)
そうですね（ここまで来られたら言い返せないんだよな）」
レミリア「私次りんご飴と呼ばれるものが食べたいわ」
鍬羅「りんご飴？あれはやめておいた方がいいぞあれ崩れて地面に落ちるぞ」

レミリア「崩れてないように食べるから大丈夫よ♪」
鍬羅「まぁ、お金は出すから好きなだけ楽しんで行こうぜ」
ーー少年、少女満喫中ーー
鍬羅「楽しかったなレミィ」
レミリア「そうね♪」
不良A「おいその兄ちゃん女と金置いて行きな」
不良B「置いてかねぇと痛い目にあうよ」
鍬羅「そう言われてハイわかりましたとでも言うと思うか？」
不良A、B「オラァーー（殴りかかってくる）」
スッ（不良の攻撃を避ける）
鍬羅「お前たちはさっさと帰りな（不良を鋭い眼光で見抜く）」
不良A、B「すいませんしたーー」
鍬羅「飛んだ邪魔が入ったな
ん？あれレミィどこ行った？」
鍬羅「レミィどこに行ったんだ？
ん？あれは・・・」
レミリア「ちょっと邪魔なのだけれどどいてくれない」
ヤンキーA「別にいいじゃねえか」
ヤンキーB「俺たち暇なんだよ」
ヤンキーC「少しだけ俺たちと遊んでくれよ」
鍬羅「おい三回だけ警告してやる
一回目お前たちレミィからてをはなせ」
ヤンキーA「やだね」
鍬羅「二回目レミィ手を離せ」
ヤンキーB「離す訳ないだろｗｗ」
鍬羅「最後の警告だレミィから手を離せ！」
ヤンキーA「あーもウルセェなぁ痛い目に合わないとわからないらしいな」
ヤンキーA、B、C「オラァーーー」
鍬羅「フンっ」（ヤンキーの攻撃を全て避ける）
鍬羅「ツラッ」（ヤンキーAの腕を背中に持っていき反対方向に捻じ

曲げ骨を折る）
ヤンキーB「アニキーこの野郎ッウラァー」
鍬羅「ツクッハ」（ヤンキーBを倒し腕ひしぎ十字固めをして腕の骨を折る）
ヤンキーC「彼女は置いて行くんで見逃してください・・・」
鍬羅「は？見逃してくれただ？
ふざけんな
三回俺の警告を聞いてレミィを離さなかったお前たちが悪い
オラッ」（ヤンキーCの顔を殴る）
鍬羅「レミィ大丈夫か？」
レミリア「ええ、大丈夫よありがとう
でも、まさか貴方がここまで強いとは思ってもいなかったわ」
鍬羅「これで少しは見直してくれたかな？」
レミリア「まぁ一応ね」
鍬羅「帰って紅魔館の奴らだけで鍋パーティーするか」
レミリア「そうね」
ーー終わりーー
前回より少し多いけどまだまだですね
友人にストーリー性が薄いと言われたのでもっと精進しないと

東方紅恋記第二弾

ストーリー第二弾
誤字脱字の可能性あり
その時はごめんなさい許してください
鍬羅「レミリアとフランが誘拐されてもう3ヶ月か・・・
敵のアジトが未だに攻略できねぇな」
ーーある日ーー
レミリア「ねぇ、フランと少し遠くのショッピングモールで買い物したいのだけど貴方のバイク貸してくれないかしら」
鍬羅「レミィ免許持ってる？」
レミリア「失礼ね！
免許くらい持ってるわよ」
鍬羅「まぁいいよ。行ってらっしゃい」
レミリア「行ってきます
フラン行くわよ～」
フラン「は～いお姉様～」
ーー5時間後ーー
鍬羅「レミィとフラン遅いな
何してんだろん？なんだこの紙」
紙に書かれている内容←
[レミリアとフランは私が誘拐した返してほしければ私のアジトまで来て私にを討つ他方法はない
取り返しに来るのを待っているぞ]
鍬羅「・・・ふっざっけんじゃねぇよ　なんでレミリアとフランが誘拐されなきゃいけねぇんだよ
待ってろよ黒幕ぶっ潰してやるからよ」
ーー現在ーー
鍬羅「くそっ、なんだよこのアジト迷宮みたいだし次から次へとバケモノが出て来てやがるこれじゃキリがねぇ
まとめてぶっ飛ばしてやる

炎雷『雷槍爆裂流星群』」
鍬羅「俺の最高火力のスペカでも殲滅できねぇのかよこんなの攻略無理だろ」
???「剣技『桜花閃々」
???「『幻朧月睨（ルナティックレッドアイズ）』」
鍬羅「お前たちは妖夢、鈴仙」
妖夢「鍬羅さんがここに入っていくのを目撃したので付いて来ました」
鈴仙「私は妖夢と同行していました」
鍬羅「とりあえずありがとう危なかった」
鈴仙「それはそうと貴方はなぜこんなところにいるの？」
鍬羅「レミィとフランが誘拐されて多分ここに幽閉されている」
妖夢「え？多分ってことはここにいない可能性もあるってことですか？」
鍬羅「いや違うここに誘拐されているのは確実だ。でもレミィとフランが幽閉されているかは確信が持てないってことだ」
妖夢「そうですか
鈴仙どうする？」
鈴仙「妖夢なにを言っているの勿論レミリアさんとフランさんを助けるのを手伝うわよ」
鍬羅「ありがとうでもこれは俺だけの問題だ妖夢と鈴仙がわざわざ危険な目に合う必要はない」
鈴仙「そんな綺麗事だけじゃ取り返せるものも取り返せなくなるわよ
ここは素直に協力に感謝すればいいの」
鍬羅「・・・妖夢、鈴仙本当にすまない」
妖夢「それはいいですけどレミリアさんとフランさんはどこにいるんですか？」
鍬羅「それがここのアジトとの最深部という事しか分からなくて道も迷宮みたいで迷ってたんだ」
椛「私も協力いたします」

鍬羅「お前は椛」
椛「私の千里眼にかかれば一瞬です
・・・見つけた」
鍬羅「どこだ？」
椛「この真下です正確には妖夢さん立っている真下です」
妖夢「えぇ！私の真下ですか？
ならば床破壊しますね」
鍬羅「やめておけ一回だけ壁を破壊しようとしたが傷1つつかない
どうやら素直に進むしかないようだ」
鈴仙「そんな！相当時間かかるじゃないですか」
鍬羅「仕方のない事だ
そういえばなぜ椛はここに？」
椛「妖夢さんと鈴仙さんがこの不気味なアジトに入っていくのを目撃したからです」
鍬羅「そうか、何にせよ人員が増えるのはいいことだ。」
椛「話は先程聞こえましたので大丈夫です
微力ですが協力させていただきます」
鍬羅「そんな事ないさ手伝ってくれるだけで嬉しいさ」
ちょうど椛がレミリアとフランを探しいる頃
レミリア「う～ん」
誘拐犯Ａ「ん？やっと目が覚めたか」
レミリア「!?　フラン！お前たちフランに何をした」
誘拐犯Ａ「こいつが暴れるから眠らせて拘束しただけさ」
レミリア「今すぐフランを離しなさい」
誘拐犯Ｂ「そう言われて離すわけないだろ
そもそもお前も拘束されているのに何かできるわけでもないだろ」
レミリア「くっ・・・離せ」
誘拐犯Ａ「無駄だその鎖はそう簡単には切れない」
レミリア「(鍬羅ならこの鎖を一瞬で切り落とすはず。だったら私にできないはずがない)
神槍『スピア・ザ・グングニル』

！切れた」
誘拐犯全員「!?鎖を切った？」
レミリア「さぁ覚悟しろお前たち
今のお前たちには勝ち目はない」
誘拐犯Ｄ「はっロリ体型のしかも女のお前に俺たちが負ける？
笑わせてくれるぜ」
レミリア「天罰『スターオブダビテ』」
誘拐犯Ａ、Ｆ、Ｅ「ぐわーーー」（死亡）
誘拐犯Ｄ「喰らえ麻酔針」
レミリア「くっ・・こんな・・・ところ・・で・・フラ・・・・・・ン」（ドサッ）←麻酔をもろに食らった
ーー鋤羅、鈴仙、妖夢、椛の所ーー
鍬羅「全然敵がいない？」
妖夢「変ですねさっきまでの数が嘘見たいですね」
???「おや？ここまで来るとは珍しい褒めてやろう」
鍬羅「誰だ！」
壩磨咧「おっとこれは申しわけない名のり遅れしまいました私はこのフロアを管理している壩磨咧（はすか）と申します」
鍬羅「要は敵って事だな」
壩磨咧「貴方達はこの先にいる吸血鬼の姉妹を救い出しに来たのでしょう？
しかし、それは不可能それは貴方達では私を倒せないから」
鈴仙「そんなのやってみないとわからないでしょう」
壩磨咧「やらなくてもわかりますよなぜならそこの白狼天狗はもう戦闘不能の状態ですから」
鍬羅「!?
いつのまに」
壩磨咧「だから言ったでしょう貴方達では勝てないと」
妖夢「以外とそうでもないですね」
壩磨咧「!?
なぜ私の両腕がない？」

妖夢「貴方は鈴仙さんと鍬羅さんと話していても私の存在、接近に気づいていなかったなので両腕を切り落としていただきました」
鍬羅「ナイス妖夢
さて壩磨啝とかいたったなあんたの負けだ」
鈴仙「『月面跳弾（ルナティックダブル）』」
鍬羅「火焔『炎神ワールド』」
壩磨啝「この私・・が負け・・・るとは・・・お見事・・です」
妖夢「なんだってんでしょかね」
鍬羅「さぁなでもなぜか敬語だったな
まぁ、先に進もうぜ」
鋤羅「この先のフロアにレミィとフランがいるんだな？」
椛「私の千里眼で見つけたので間違いありません」
妖夢「相手が一人だと椛さんが言っていたけど相手が一人ということは…」
鋤羅「相当強敵だろうな」
鈴仙「でも私の瞳で狂わせればなんとか…」
鋤羅「おそらくそれは無理だろう
相手がたったの一人だ
なんの対策もなしに闘うことはないだろう
だからと言ってこのままここにとどまるわけにもいかない
全員で一斉に攻撃するぞ」
椛・鈴仙・妖夢「はい！」
ギィ…（扉の開く音）
???「やっときたか待ちくたびれたぞ」
鋤羅「やっぱりお前か鵞蠡翊（がりく）」
鵞蠡翊「あの日お前に負けてから俺は死ぬ気で努力した
でも努力だけではお前には辿り着けず化け物になる道を選んだ」
鋤羅「俺に負けたらからってレミィとフランは関係ないだろ」
鵞蠡翊「こうでもしないとお前来ないだろ？」
鋤羅「そんな事しなくても決闘しろと言えば戦ったさ
なのにお前はレミィとフランを誘拐したそれは許されない行動だ

よって俺はお前をこの世から抹消する！」
鵞蠡翅「お前では化け物になった俺には敵わない事を教えてやる！」
鋤羅「雷獄『降り注ぎし雷槍』」
妖夢「剣技『桜花閃々』」
鈴仙「月眼『月兎遠隔催眠術（テレメスメリズム）』」
椛「山窩『エクスペリーズカナン』」
鵞蠡翅「その程度か？」
鋤羅「嘘だろ…俺たちの最高火力のスペカでも倒れないのか？」
妖夢「いえそんな事は無いはずです絶対どこかに…どこかに弱点があるはずです」
鈴仙「でもそれまで私たちの体力が持ちません」
妹紅「ならば私が囮役をしよう」
鋤羅「妹紅警部なんでここにいるんですか？」
妹紅「実は慧音にこの塔を調査するように言われてな進んでいたらここにたどり着いたというわけだ」
鋤羅「さっきの囮役とは？」
妹紅「私が奴の気を引くそのうちに奴の弱点を見つけ出せ」
鋤羅「そんないくら妹紅警部でも無茶ですよ」
妹紅「大丈夫だなんとかなるさ」
鵞蠡翅「話し合いは終わったか？」
妹紅「おい来るぞ！」
ズガン（床に鵞蠡翅の攻撃が当たる音）
妹紅「爪符『デスパレートクロー』」
鵞蠡翅「暗記『完全コピー』これで今のスペカは完全コピーした」
妹紅「どれだけ似ても所詮はコピー
オリジナルには勝てねぇよ
不死『凱風快晴飛翔脚』からの焔符『自滅火焔大旋風』」
鵞蠡翅「壁符『全て遮る物』」
妹紅「まだまだ～貴人『サンジェルマンの忠告』時効『月のいはかさの呪い』滅罪『正直者の死』蓬莱『凱風快晴　―フジヤマヴォルケ

イノ―』
妖夢「こんだけ妹紅さんがスペカを打ち込んでも倒れないなんて…」
鈴仙「妹紅さんのスペカは幻想郷でも高威力なのに」
椛「私たちで本当に倒せるのでしょうか」
鋤羅「・・・」
椛・妖夢・鈴仙「？」
鈴仙「鋤羅さんどうしたんですか？」
鋤羅「・・・なってる
妖夢「え？なんて言いましたか？」
鋤羅「動きが少し鈍くなっている」
椛「そういわれてみれば少し鈍いですね」
鋤羅「多分自分の膨大な力を制御しきれないで自分自身が防いだり攻撃するたびにに自分もダメージを食らうんだと思う」
鈴仙「という事はここにいる全員で同時にもう一度スペカを打ち込めば…」
妖夢「倒せるかもしれませんね」
鋤羅「妹紅警部俺たちと合わせてスペカを打ってください」
妹紅「・・・わかった」
鋤羅「獄炎『煉獄ボルケーノ』」
妖夢「人符『現世斬』」
鈴仙「月眼『月兎遠隔催眠術（テレメスメリズム）』」
椛「狗符『レイビーズバイト』」
妹紅「炎符『フェニックスの超高温な羽』」
鵞蠡翊「なんだ・この威力は・・・・・今まで感じた事の無い・・・力
そうか俺は・・・ここまでしても・・鋤羅には・・・勝てないのか」
ドサッ（鵞蠡翊の倒れる音）
鋤羅「レミィフラン大丈夫か？」
レミリア・フラン「・・・」
鋤羅「嘘・・だろ・・・」

鈴仙「鋤羅さん落ち着いてくださいどうやら気絶しているだけ見たいです」
ーー少年、少女（鋤羅の家に）移動中ーー
レミリア「ん、はっここは？」
フラン「はぁ～お姉様？」
レミリア「フラン！無事だったの」
鋤羅「やっと目を覚ましか
ちなみにここは俺の家だ」
レミリア「どうして私達がここに？
確か誘拐されて幽閉されたはずだったのに」
フラン「お兄様が助けてくれたのよ」
レミリア「それはわかるけどどうやって私達誘拐されたのを知ったの」
鋤羅「俺の寝ている時に紙が落ちてきて［レミィとフランを誘拐した助けて欲しければここまで来い］って書いてあった」
レミリア「あなた一人で来たの？」
鋤羅「いや、向かったのは一人だが途中で妖夢、鈴仙、椛、妹紅警部と合流した」
レミリア「それって後から来たの？」
鋤羅「まぁそうだな」
レミリア「じゃあ妖夢と鈴仙と椛と妹紅警部にもお礼をしないとね」
～～少女お礼中～～

ーー数日後ーー
フラン「もーお姉様少し手加減してよ」
レミリア「フランが練習不足なだけよ」
鋤羅「そうは言うけど俺に勝てた事ないよな」
レミリア「今鋤羅には関係ないわ
これは私とフランの戦いよ」
鋤羅「へいへい

昼ごはん作るから呼んだら来いよ」
レミリア「わかってるわよ
（鋤羅貴方は私の事を命がけで助けてくれた
私はそれがとても嬉しいわ）」
ーー終わりーー

これでやっと約４０００字・・・
まだまだ精進の余地がありますね
次の話はせめて今まで一番頑張るので待っていてください

天子の本当の気持ち

天子「はぁ～」
レミリア「どしたのため息なんかついて」
天子「レ、レミリア様いつからそこに？」
レミリア「今来たところよ
それよりどうしたの何かあるの？」
天子「鋤羅がどんどん強くなって今ではもう私を倒せるくらい強くてもう私が教えることがないんです（でも本当は違う・・・私は鋤羅の事が好き。でも鋤羅はもうレミリア様と既婚しているから奪えないそれが辛いだけ・・・）」
レミリア「そうねじゃあ貴方には今日から紅魔館の総司令官を担ってもらうわ」
天子「そんな・・私には無理です」
レミリア「無理なら私も貴方に頼まないわ
でも天子なら出来ると思ったから頼んだわ」
天子「・・・」
レミリア「別に無理にやれとは言わないわ
天子がやらないのであれば鋤羅に任せるから」
天子「・・・」
レミリア「わかったわ貴方が見事紅魔館の総司令官を果たすことができたら褒美をあげるわ」
天子「・・・やってみます」
ーー少女移動中（レミリア）ーー
レミリア「鋤羅いる？」
鋤羅「どうしたの？」
レミリア「天子に今日から紅魔館の総司令官を務めてもらう事になったのだけど」
鋤羅「それで？」
レミリア「褒美をあげるって言ったのだけど褒美を考えてなかったから貴方が考えた褒美でいいから天子に言ってちょうだい」

鋤羅「褒美くらい考えてから言えよ・・・
まぁいいや一つ思いついたからな」
レミリア「ありがとう」
ーー少年移動中ーー
鋤羅「おーい天子ーいるかー」
天子「なに？冷やかしなら来ないでくれる？」
鋤羅「そう邪険にしないでくれ
レミリアから聞いているかもしれないが総司令官を果たした時の褒美の話をしに来た」
天子「そうなの？
それで褒美って何？」
鋤羅「この館内の誰か一人を1日だけ自分のものにしていい権利だ」
天子「本当それ？」
鋤羅「本当だ
嘘をつく理由がないからな」
ーー数日後ーー
咲夜「館内に化け物が侵入しました」
レミリア「嘘・・・なんで？」
鋤羅「化け物って前のあいつか？」
咲夜「いえ違います。恐らく前に来たものよりももっと凶悪なものだと思われます」
鋤羅「嘘だろ？
チッ、もういい俺が倒しに行ってくる」
天子「まちなさい。今の紅魔館の総司令官は私よ貴方の勝ってな判断での行動は許さないわ」
鋤羅「グッ、じゃあ早く指示を出してくれよ」
天子「現在こころと文と美鈴さんで撃退に向かわせています。しかし3人でも恐らく撃退は不可能でしょう
なのでレミリア様とフラン様と鋤羅も撃退に加わってください」
鋤羅「了解・・・」

レミリア「わかったわフランを呼んでくるわね」
ーー前線部ーー
こころ「くっ、何こいつ硬すぎ」
文「それに動きが速い・・・」
美鈴「動きが全く予測できない・・・」
鋤羅「三人とも伏せろ！
火球『跳躍火焔弾』」
バン×３（火球の爆発音）
鋤羅「大丈夫か？」
こころ「なんとか」
文「はい」
美鈴「大丈夫です」
鋤羅「とりあえずレミリアのいるところまで下がるぞ」
ーー少年、少女移動中ーー
レミリア「フラン新しいおもちゃがいっぱいやって来たわよ」
フラン「お兄様の後ろにいるの全部と遊んでいいの？」
レミリア「いいわよ」
フラン、レミリア、美鈴、文、こころ、鋤羅「「「「「スペルカード発動」」」」」
フラン「禁忌『レーヴァテイン』
禁弾『スターボウブレイク』」
レミリア「神槍「スピア・ザ・グングニル』
紅符『スカーレットシュート』」
美鈴「華符『破山砲』
極彩『彩光乱舞』」
文「風神『二百十日』
竜巻『天孫降臨の道しるべ』」
こころ「憂符『憂き世は憂しの小車』
憑依『喜怒哀楽ポゼッション』」
鋤羅「獄炎『煉獄ボルケーノ』
雷星「雷竜流星群』」

鋤羅「やったか？」
化け物「いや、まだだね」
ドッ（後ろからレミリアを蹴る音）
鋤羅「テメェここからは生きて帰ると思うなよ
封空『絶対領域』ここからは俺とお前の一騎打ちだ
お前は俺を倒すまでここから出られない」
化け物「面白いやってやろうじゃないか」
鋤羅「戯言を言っている場合か？
雷槍『斬撃レールガン』」
化け物「グハッ、いつのまに後ろに？」
鋤羅「この空間は俺が作ったからなこの空間の支配者は俺だ
よってこの空間の中でお前は勝てない」
化け物「人間風情がふざけやがって
崩破『崩壊させし熱戦』」
鋤羅「残念だな～俺に熱系の攻撃は効かない」
化け物「そうかなら
氷華『全滅氷結弾』」
鋤羅「グッ、寒い・・・
本当はやりたくないが・・・仕方ないな
吸引『属性付与〈氷〉』」
化け物「・・何をした？」
鋤羅「見たほうが早いさ
獄炎『煉獄ボルケーノ〈氷〉』」
化け物「なんだこれは炎に氷が混ざっている？
まさか自分のスペカに氷の属性を付与したといのか」
鋤羅「ご名答でももう死んでもらうね
雷星『雷竜流星群〈氷〉』」
化け物「グッ、この俺が負けるとは・・」
ドサッ（化け物の倒れる音）
ーー数時間前ーー
レミリア「天子ありがとう貴方の的確な指示がなかったら今頃みん

な死んでいるわ」
天子「そんな私は何も
それに殆どは鋤羅がやったそうじゃないですか」
レミリア「天子が鋤羅を投入したから勝てたのよそれで褒美は使うの？」（レミリアは鋤羅が与える褒美を何かもう知っている」
天子「使わせて頂きます
・・・レミリア様には失礼であることを重々承知ですが・・・鋤羅を1日私の物にさせて頂きます！」
レミリア「・・・貴方もしかして鋤羅の事が好きだったの？」
天子「はい・・・なので」
レミリア「わかったわ
だけど1日だけよ？鋤羅は既に私と既婚しているのだから」
天子「ありがとうございます」
ーー少女（天子）移動中ーー
天子「鋤羅いる？」
鋤羅「どうした天子？
自ら来るなんて珍しいな？
・・・どうしたのその格好？」
天子「似合うかな？」（ウエディングドレス姿）
鋤羅「いや、似合うどころかスゲ～可愛いなその格好
それでどうしてここにいるの」
天子「前の褒美でレミリア様に頼んで1日だけ貴方の私の物にすることにしたのよ」
鋤羅「レミリア承諾したの？」
天子「したわ」
鋤羅「そうか・・・（いやおかしいだろなんであいつ俺と結婚してるのわかって承諾したの？意味わかんねー）」
天子「・・てる？鋤羅聞いてる？」
鋤羅「あっ、ごめん聞いてなかった」
天子「じゃあもう一回だけ言うわね
・・・今日の夜貴方のベットで添い寝させてください」

鋤羅「今日の俺は天子のものだからな断るわけにはいかないな」
天子「ありがとう鋤羅」
ーーその夜ーー
天子「これも新しく買った寝巻きなんだけど・・・似合うかな？」（猫耳付きのパーカーを着ている）
鋤羅「すごく似合ってるよ可愛い」
レミリア「・・・天子見せつけてくれるじゃない
これじゃ天子に奪われそうね
まぁそれは鋤羅の気持ち次第だからいいのだけど」
ーー終わりーー
今回初めて作る恋愛系ですね←そうでもなくね？
毎度のこと誤字脱字が多いかもです
自分でも何回か見直しているんですがそれでも見落とす事がありますそこのところはご了承ねがいます

天子の本当の気持ち2

天子「初めて貴方と同じベットで寝てみたけど貴方寝相相当いいわね」
鋤羅「まぁよく言われるよレミィにも言われたし」
天子「それにしても貴方昨日よく一人で化け物を倒したわね
どうやって倒したの？」
鋤羅「戦場にある程度の広さの空間を作ってその中で戦う」
天子「それだけじゃわからないわよ」
鋤羅「その空間を作ったのは俺
という事は？」
天子「その空間の支配者は鋤羅だから倒せたという事？」
鋤羅「そういう事
そういえば天子昨日から随分と愛想良くなったな」
天子「そうかしら？
私は特に何も感じないけど」
鋤羅「俺は愛想のいい天子よ方が好きだな」
天子「ありがとう・・・」
鋤羅「・・・なんで俺を1日だけ自分の物にしたかったの？」
天子「知りたい？」
鋤羅「出来ればていいけど」
天子「教えてあげるわ
私ねここに雇われた時正直つまらないと思っていたの
でもね貴方の師匠になってからは毎日が楽しかった」
鋤羅「俺以外にも何か教えていたのか？」
天子「基本的にフランの家庭教師みたいな感じだったわ
ってそんな事はどうでもいいの
私は最初なんで毎日が楽しいかわからなかった
でも最近になって気づいたの貴方のことか好きだって」
鋤羅「だからいつもレミィと一緒いる俺を1日でもいいから奪って見たかったのか？」

天子「・・・うん」
鋤羅「俺も天子のことは好きだけどレミィと結婚している以上天子と結婚は愚か付き合うことも出来ない
でもレミィに頼めば一緒に買い物に行くくらいなら許してくれるさ」
天子「本当かな？」
鋤羅「天子が説得出来なくても俺がしてやるから」
ーー少年、少女移動中ーー
天子「あのレミリア様」
レミリア「天子どうしたの失恋でもした？」
天子「違いますよ
からかわないでください」
レミリア「ごめんごめん
それでどうしたの？」
天子「鋤羅さんと一緒に買い物に行く権利をください」
レミリア「それは鋤羅ともうちょっと長い時間一緒に居たいから？」
天子「そうです」
レミリア「はぁ仕方ないわね貴方の気持ちがわかるから承諾するけどもし理解して居なかったら拒否していたわね」
天子「レミリア様ありがとうございます」
レミリア「いいのよ」
天子「失礼します」
ーー少女（天子）移動中ーー
鋤羅「どうだった？」
天子「承諾を得ららたわ」
鋤羅「そうかよかったな
俺は図書館で資料の作成しなきゃいけないから用事があったら呼んでくれ」
ーー少年移動中ーー
パチュリー「貴方レミィの機嫌を損ねない方がいいわよ」

鋤羅「はぁ？何言ってもるの？
別に機嫌悪くしてないじゃん」
パチュリー「そう見えるだけであってそうじゃないのよ
あの子結構内に秘めるからね」
鋤羅「そうなのか・・・」
パチュリー「今夜レミィの事を思いっきり愛でてあげなさい」
鋤羅「わかったよ」
ーーその夜ーー
鋤羅「レミィ入るぞ」
レミリア「いいわよ」
鋤羅「今日俺の部屋で一緒に寝ないか？」
レミリア「もちろん一緒に寝ましょう」
天子「やっぱり私じゃレミリア様に敵わないのね・・・」
ーー終わりーー
天子の本当の気持ちの続きみたいな感じですね
今回これは夜中に作ってるので文字数少ないですが許してくださいい

少女達の知らない鋤羅

天子「なんで鋤羅はレミリア様と結婚する事を決めたのかしら？」
レミリア「知りたい？」
天子「うわっレ、レミリア様聞いていたんですか？」
レミリア「ええ、全部聞いていたわ
鋤羅がね私と結婚した理由わね彼の力が関係しているのの
ある日こんな事があったの」
ーーそのある日ーー
鋤羅「ここに異変の主犯がいるんだな？」
レミリア「間違いなわ」
ギィ…（扉の開く音）
鋤羅「雑魚の化け物がわんさかいるな」
レミリア「まとめて消し飛ばしましょか」
鋤羅、レミリア
「スペルカード発動」
鋤羅「火焔『全て溶かしゆる獄炎』
レミリア「天罰『スターオブダビデ』」
鋤羅「ふぅ、片付いたな」
ーー少年、少女（最下層に）移動中ーー
鋤羅「あんたが異変の主犯か？」
主犯「だったら？」
鋤羅「この鹽嵜鋤羅」
レミリア「レミリア・スカーレット」
鋤羅、レミリア「この名の名誉にかけてお前を滅する！」
主犯「面白いやつだな
いいだろう相手してやる」
ーー死闘三時間経過した頃ーー
主犯「まず一人女の方が死んだな」
鋤羅「おい、嘘だろ・・レミィ・・目を覚ましてくれよ」
主犯「無駄だそいつはもう死んだ」

鋤羅「そうか・・・
お前はもう生きる事が出来ないな」
主犯「は？何を言って・・・！
お前その姿は」
鋤羅？「お前は俺が何物か理解せずに死んでゆく」
主犯「フン、関係ないな
なぜなら・・！」
鋤羅？「ちょっとうるさいから両腕を引き千切った」
主犯「な？いつの間に
クソ・・・！」
鋤羅？「黙れて言っただろう？
黙らないから次は両足を引き千切った」
主犯「認めないぞこんな負け認めｎ・・・」
鋤羅？「あぁもう黙らないから心臓ぶち抜いちゃったじゃねぇかまぁいいかどっちみち死ぬ運命だったからなってもう聞こえてないか」
妹紅「おい鋤羅どこへ行く？」
鋤羅？「あ？お前達誰だ？」
妖夢「妹紅警部この人鋤羅じゃありません」
妹紅「どういう事だ？」
鈴仙「見た目そのものは鋤羅ですが人格が違う・・・
もう一人の鋤羅の人格だと思われます」
妹紅「そうか・・・
鈴仙お前は銃は大体使えるよな？」
鈴仙「はいそうですけど・・」
妹紅「私と妖夢で気をひくからこの麻酔銃を鋤羅に打ち込んでくれ」
鈴仙「わかりました」
妹紅「じゃあ行くぞ！」
鈴仙、妖夢「「はい！」」
妹紅「オラオラどうした？そんなものか？」

妖夢「！鈴仙背中に回り込んで銃を撃って」
鈴仙「わかった」
バンッ（銃声）
ドサッ（鋤羅の倒れる音）
妹紅「よくやったとりあえずそこのレミリアと鋤羅を紅魔館へ運ぶぞ」
妖夢、鈴仙「はい」
ーー少女達（紅魔館に）移動中ーー
レミリア「んっふぁ～あ」
妹紅「目が覚めたか」
レミリア「貴方が助けてくれたの？」
妹紅「それより重要な話がある聞いてくれるか？」
レミリア「構わないわ」
妹紅「鋤羅に最下層で会ったら鋤羅じゃない鋤羅に会った
恐らくあれは普段表に出ない裏の鋤羅だな
そしてその裏の鋤羅は膨大な力を持っており制御出来ずに暴走する
今は封印してあるが力が特殊故かいつか封印は解けるだろう
解けた直後は大丈夫たがもう一人の鋤羅出たら完全に終わりだ」
レミリア「そんな・・どうすれば？」
妹紅「最大の力・・つまり嬢ちゃんが愛の力でもう一人の鋤羅を完全に浄化させるしかない
出来るか？」
レミリア「鋤羅の為ならなんでもするわ」
ーー現在ーー
レミリア「という方があったのよ」
天子「なんかすごく複雑ですね」
レミリア「簡潔に言うともう一人の鋤羅を完全に浄化させるために鋤羅と結婚したという事よ
もちろん鋤羅のことは一番愛しているけどね」
天子「そうなんですか・・・」

鋤羅「おーいレミィー、天子ー昼ごはん出来たぞー」
レミリア「お昼みたいね行きましょうか」
天子「はい」
ーー終わりーー
今回も短いですねすいません
基本更新は深夜にやっているので２０００文字行く事が五回に一回あるかないかくらいですね
今回はレミリアがなぜ鋤羅と結婚したのかの理由を天子に話すという内容ですね

鋤羅とレミリアの秘密の勉強会（天子とこころと文も出ます）

鋤羅「やっと春休みに入ったなまぁ比較的春休みは長いからゆっくりできるな」
レミリア「あらもうそんな時期？」
鋤羅「俺のところが早いだけだよ」
レミリア「そうなの？
どれくらい休みなの？」
鋤羅「今日から（３月２８日）から５月１８日まで」
レミリア「え？長すぎない？」
鋤羅「夏休みが短いのと冬休みがないのが関係しているからな
それにしても夏休みとかは色々あったな」
レミリア「色々って？」
鋤羅「レミィにプロポーズしたり、新婚旅行に行ったり化け物が襲撃して来たり、レミィとフランが誘拐されたり、天子に告白されたりといっぱいあったな」
レミリア「そうね、ていうかなんで今貴方の部屋に皆んな集まってるの？」
鋤羅「最初に言ったろ？全員の高校の頃の苦手科目を克服するためって」
レミリア「そうだったわね
それで皆んなどの教科が苦手で得意なの？
私は英国はできるけど化学が苦手ね」
鋤羅「俺は現代文と古典と情報はできるが
極端に英国と化学が苦手だ」
天子「私は数学と化学が得意だけど現代文が苦手ね」
こころ「わたしはと英語と情報は得意だけど古典がすごく極端にに苦手ね」
文「私は古典と化学は出来ますが情報は苦手ですね」

鋤羅「なんか・・現代文と古典と英語と数学と化学と情報に別れたな」
レミリア「そうね」
鋤羅「じゃあ席替えするか」
ーー少年、少女席替え中ーー
鋤羅「ねぇレミィここ教えて」
レミリア「天子ここの計算式これで合ってる？」
文「どうしたらこころさん見たいに早くキーボード打てるんですか？」
こころ「鋤羅この部分現代語訳したらどうなるの？」
鋤羅「ストッーープストップ
これじゃまともに勉強できないからやり方変えよう」
レミリア「例えば？」
鋤羅「教える順番を決める・・・とか？」
天子「それだ！」
鋤羅「じゃあ俺とこころが文に情報教えて、
次にレミリアとこころで俺に英国教えて、
（中略）
という感じで行こうか」
レミリア、文、天子、こころ「「「わかった」」」
ーーP・M11：10ーー
鋤羅「ふーやっと終わったー
これで会社試験受かるかな」
レミリア「あれ？会社試験なんてあったの？」
鋤羅「あぁなんか数年に一度試験をするらしい
それで能力のないやつから切り落とされるって話だ」
レミリア「なんか・・・あれね・・凄い辛い現実ね」
鋤羅「まぁ世間なんてそんなもんさって割り切ってしまえば割と普通に感じるよ」
天子「なんで私達まで勉強会したの？」
レミリア「紅魔館でも数年に一度試験をするの

でも基礎能力を試すだけで切り落とされたりとかないのよ」
文「そうなんですか・・・
やっぱり給料とかも変動するんですかね」
レミリア「多少はね
成績が良ければボーナス追加だし悪ければ下げるし
でもそこまで生活影響ないわね
基本的にどれくらい紅魔館に貢献したかで決まるからね」
こころ「下げるって言ってもどれくらいなの？」
レミリア「そんなに大きくないわ貴方達の月収が最大でも１００円減るくらいだわ
貴方達紅魔館でも貢献してる方だから月収８５万だからあんまり痛くないわね」
鋤羅「まぁ勉強会は絆が深まったりしたしよかったじゃないか」
レミリア「そうね」
ーー終わりーー
今回初のバトルなしの話です（多分）
やっぱりこれぐらいの文字数が限界ですかね
まぁこれから先には文字数が多いのも出ると思うのでよろしくです

レミリアと鋤羅のとある一日

鋤羅「なぁレミィこの机と椅子そろそろ変えた方がいいんじゃない？

もうボロボロだぜ」

レミリア「そうね明日買いに行きましょうか」

ーー翌日ーー

鋤羅「じゃあ行くか」

レミリア「そうね」

ーー少年、少女（ニ〇リに）移動中ーー

鋤羅「いっぱいあるな」

レミリア「どれにしようかしら？」

鋤羅「前と同じ感じのやつかそれとも全く違う感じのやつにするか・・・

レミィはどっちがいい？」

レミリア「やっぱり違う感じのがいいかな同じ風景だと飽きちゃうでしょ？」

鋤羅「そうだな」

ーー少年、少女支払い中ーー

鋤羅「・・・レミィが余計なもの買うから一万以上予算オーバーだな」

レミリア「別にいいじゃない」

鋤羅「それでもソファーまだ新しいのあるのに買うか？」

レミリア「だって欲しかったんだもん」

鋤羅「（やべぇ怒ったレミィめっちゃ可愛い）

そうですか」

ーー少年、少女帰宅中ーー

咲夜「お帰りなさいませお嬢様、鋤羅さん」

レミリア「咲夜今日の夕飯私のと鋤羅の分は鋤羅の部屋に持ってきて」

咲夜「かしこまりました

ではすぐ準備いたします」
鋤羅「さてこっちも準備するか」
レミリア「あの悪いのだけど貴方一人でやってくれな？」
鋤羅「仕方ないなぁ仰せのままに
ちゃんと俺の部屋で待ってろよ？」
レミリア「わかったわありがとう」
ーー少年家具取り替え中ーー
ー方レミリア
レミリア「はぁなんで私素直になれないのかしら
本当鋤羅ともっと一緒にいたいだけど鋤羅を前にするとどうしても平常心を保てない・・・
結婚もしているのに吸血鬼たる私が人間と結婚をしてもなおまだ惚れ続けるなんてね。情けないわ」
ガチャ…（扉の開く音）
鋤羅「はぁ～疲れた」
レミリア「お疲れ様♪
見たん感じどう？」
鋤羅「レミリアのチョイスが良かったな
違和感はあるが馴染んでいる」
レミリア「違和感は・・・当然ね今までと違うのだから」
鋤羅「・・・レミィどうした？」
レミリア「な、なにが？」
鋤羅「いつものお前なら褒美を欲しがるくせに今日は求めないんだな」
レミリア「今日は鋤羅が家具な取り替えをしてくれたからよ」
鋤羅「それだけじゃ理由にならないぜ
レミィはなにがあっても褒美を欲しがるからな」
レミリア「そ、それは・・・」
鋤羅「俺はレミィの事が好きだがいつもらしいレミィが一番好きだよ」
レミリア「・・・！」

鋤羅「あっ、レミィ顔が赤いぞ～w」
レミリア「っ！仕方ないじゃない
既婚とはいえ好きと言われてら照れるわよ」
鋤羅「そんなもんなのかね～」
咲夜「お嬢様、鋤羅さん夕飯をお持ちしました」
鋤羅「ありがとそこ置いといて」
咲夜「かしこまりましたそれでは失礼します」
鋤羅「さぁ飯食べようぜ」
ーー少年、少女食事中ーー
レミリア「貴方はが私のこと茶化すからご褒美求めるわ」
鋤羅「いいぜなんでもこい」
レミリア「貴方は寝る前に私とキスをしなさい」
鋤羅「・・・え？」
レミリア「もう一度言うわ
寝る前にキスしなさい」
鋤羅「っ！わかった
わかったよすればいいんでしょすれば」
レミリア「よろしい
（なんだ私このままでいいんだ私もそのままの鋤羅が好きだし）」
ーー終わりーー
やっぱり自分の好きキャラが変わらずレミリアなんでレミリアが絶対出てきますね
自分これから部活が忙しくなるのでしばらく休止します
復帰のめどは立っていませんが気長に待っていてください

レミリアの夢の中

鋤羅「レミィいつまで起きてんの？
早く寝なよ目の下のクマやばいぞ」
レミリア「そうね
今日はもう寝るわおやすみなさい」
鋤羅「はい、おやすみ」
ーー夢の中ーー
鋤羅「なぁレミィ俺たち付き合ってるよね？」
レミリア「そうよそれがどうかしたの？」
鋤羅「あのさ、もし俺が浮気じゃないけど
浮気みたいな行動したらどうするの？」
レミリア「それはもちろん否応なしに分かれるわよ
鋤羅もしかして浮気する気？」
鋤羅「まさか有り得ないだろ
俺はレミィ以外の女を好きになった事ないよ」
レミリア「鋤羅（すきら）だけに？ｗｗ」
鋤羅「人の名前で遊ぶなよ
どう反応すればいいかわかんないだろ」
レミリア「ごめん、ごめん
面白かったからつい」
鋤羅「まぁでも実際付き合って3年経つしどっちがどう告白したから覚えないな」
レミリア「鋤羅忘れたの？
鋤羅が伝えたい事があるとか言って名古屋の観覧車の一番上に来た時に『俺はレミリア・スカーレットさんに一目惚れしました付き合ってください』って言ったじゃない」
鋤羅「あ、思い出してきた
俺あの時めっちゃ緊張したからね」
レミリア「でしょねｗｗ
だって鋤羅が告白した時顔赤かったもん

それで私がＯＫしたら…」
鋤羅「ストーップそれ以上言わないでくれ
今思い出しただけでも恥ずかしくなるから」
レミリア「今更何言ってるの？
もう三年よ？
恥ずかしいもクソもないわよ
私がＯＫした瞬間私のことお姫様抱っこしたくせに」
鋤羅「あれは…
レミィが喜ぶかと思ったとった行動だよ」
レミリア「喜ばないわけないじゃない」
鋤羅「だよな喜ばない…え？
喜んだの？」
レミリア「当たり前じゃない私がＯＫした理由は私も鋤羅が好きだったからよ
好きな人にお姫様抱っこしてもらえるとか最高じゃない」
鋤羅「そういえば俺とレミィのファーストキスいつだっけ？」
レミリア「それも忘れたの半年くらい前に夜の海の前で私の頬に不意打ちでキスしたじゃない」
鋤羅「こう考えたら俺色々とやばい人間だな」
レミリア「それが鋤羅の一番の魅力だと私は思うわ」
ーー現実ーー
レミリア「ん、ん～ふぁ～
おはよう～」
鋤羅「レミリア寝顔可愛いかったよ
だから唇にそっとキスしといた」
レミリア「…！
ちょっと鋤羅勝手に私の唇にキスしないでよ
う、嬉しいじゃない」
鋤羅「あ、やっぱり嬉しいんだ」
レミリア「当たり前よ」
鋤羅「ねぇもう一回目瞑って」

レミリア「どうして？」
鋤羅「いいから、いいから
レミィ手出して」
レミリア「はい」
鋤羅「目開けていいよ
誕生日おめでとうレミィ」
レミリア「え？」
鋤羅「今日レミィの誕生日だろ？
レミィに内緒でプレゼント買っておいた」
レミリア「中身は？」
鋤羅「開けてみて」
レミリア「これは…！」
鋤羅「前からレミィが欲しがってたアレキサンドライトの宝石」
レミリア「買っといたって高かったでしょ？」
鋤羅「まぁそれなりの値段はしたよ
でも業者に最大限値切ってもらった」
レミリア「ありがとう」
鋤羅「そしてこれも」
レミリア「なに？これは？」
鋤羅「今日はレミィの誕生日ともう一つ
俺たちが結婚してからちょうど一年が経った日
だから結婚記念日の一週間以内に旅行いこうと思って切符買っといた行き先はもちろん名古屋
明日出発だから準備しておいてね」
ーー終わりーー
友達に早く続き作れと言われたので作りました
部活忙し方ストーリーを考える暇もないし
作成、編集も夜中にやる羽目になるし
俺の友達は人じゃなくて鬼か？
あと復帰はもしかしたら２２～２５日の間のどこかです
それまでは多分投稿しないと思います

鋤羅の一生傷と花粉症

鋤羅「はっくしょん」（くしゃみ）
レミリア「鋤羅どうしたの風邪？
それともインフルエンザ？」
鋤羅「この時期インフルエンザはおかしいだろ
花粉症だよ花粉症」
レミリア「そういえば嫌いな季節は春って言ってわね
花粉症ってそんなに辛いの？」
鋤羅「ん～花粉症は別名季節性アレルギー性鼻炎っていうから
アレルギーのレベルによるね」
レミリア「レベルって何段階なの」
鋤羅「全部で1～5で俺は4か5だね」
レミリア「それって結構危なくない？」
鋤羅「別にレベルが最大だからって死ぬわけじゃないんだし大丈夫だよ
そもそもレミリアだけ残して死ねないよ」
レミリア「ま、まぁそんな事はどうでもいいとして
花粉症ってどんな症状が出るの？」
鋤羅「まぁ鼻炎って言うくらいだから鼻づまり、鼻水、くしゃみだね
あとおまけで目にも症状がです
目は主に充血、涙、かゆみだね」
レミリア「だから鋤羅春になったら泣いていたり、目をこすっていたり、充血していたのね」
鋤羅「こすってるところと充血しているところは見られてもいいけど泣いているところは見られたくなかったな」
レミリア「仕方ないじゃない1日の9割くらい鋤羅の部屋で生活しているもの」
鋤羅「それトイレと風呂以外の時間は俺の部屋で生活しているってことになるんだけど」

レミリア「実際そうでしょ？
だって私とあなたの部屋は壁を取っ払って同じにしたんだから」
鋤羅「そうでした」
レミリア「ベットもくっつけているし
ご飯はここに持ってきてもらってるし」
鋤羅「やっぱりそういう〔運命〕かぁ～」
レミリア「？鋤羅その足の傷どうしたの？」
鋤羅「ん？あぁこれ？
気にするなこれは一生傷だ」
レミリア「あなた前にも一生傷があるって言ってなかった？」
鋤羅「うん言ったよ」
レミリア「一体いくつあるの？」
鋤羅「思いつくだけで二十一個かな」
レミリア「え？二十一個もあるの？」
鋤羅「うん
それくらいあるな」
レミリア「なんでそんなにあるのよ？」
鋤羅「ほら紅魔館防衛戦とかあったじゃん」
レミリア「でもそれだけじゃそんなに多くの出来ないわ」
鋤羅「小さい頃にいろいろとバカやってたからな
一生傷くらい結構あるよ？」
レミリア「あと鋤羅声おかしくない？」
鋤羅「言ったろ花粉症だって
花粉症だと鼻づまりがあるから鼻声になるし喉も痛くなるからな」
レミリア「・・・まぁそんな事はどうでもいいわ」
鋤羅「どうでもよくないけど・・・なに？」
レミリア「鋤羅が良ければだけどあのさ・・・一緒に・・お風呂に入らない？」
鋤羅「え？・・は？一緒に風呂？
いやいやなんでそんな事言い出すの？
〈別にいいけど〉←小声」

レミリア「いやそんな変な意味はないわ
その鋤羅の一生傷を見てみたいの」
鋤羅「いやいいけど」
レミリア「いいの？じゃあ一緒に入りましょう♪」
鋤羅「そういう意味じゃないけどまぁいっか
どうせ既婚者なんだし」
ーー少年、少女入浴中ーー
レミリア「鋤羅の一生傷意外とすごいはっきりわかるのね」
鋤羅「そうか？まぁこんなの見なれたからな」
レミリア「でも一番驚いたのは
一緒にお風呂に入っても性欲が全く出ないことね」
鋤羅「レミリアの中の俺ってそんなに性欲不満な人間だったの？」
レミリア「そんな事はないけど少し性欲が出るかなと思っただけよ」
鋤羅「まぁいいや
今日はどうやって寝るの？」
レミリア「もちろん鋤羅のベットに潜りに行くわ」
鋤羅「レミリアどんだけ俺の事好きなんだよ」
レミリア「どれくらいか？
鋤羅のになら自分の全てを委ねても構わないって言うくらい好き」
鋤羅「それ以外とやばい事言ってるよ」
レミリア「例えよ例え
そういう鋤羅は私の事どれくらい好きなの？」
鋤羅「レミリアになら命を預けても構わないくらい」
レミリア「鋤羅もやばい事言ってるじゃない」
鋤羅「そうだな
まぁお互いやばい事言うくらい好きなんだよ」
ーー終わりーー
今回結構強引に終わらせましたすいません
自分もやっぱり花粉症なんで目とか鼻とか喉がやばいですね
この小説の中の鋤羅は花粉症なんてもう慣れっこていう設定です

自分も慣れましたかがどうしたも気になります
花粉症本当に辛い花粉させなければ春もいい季節なんですけど花粉のせいだけでぶち壊しです
→自分の事だけ書いてすみません
まだ投稿するので待っていてください

エイプリルフール

レミリア「あのさ今日で結婚して6ヶ月じゃない？
だからさお互いなにか買いましょう」
鋤羅「(来たこのエイプリルフールに迫られる選択)
何でさ6ヶ月経った今日なの来月でも良くない？」
レミリア「6ヶ月ということは半年ということよ
だから今日なの」
鋤羅「(理由が嘘がどうか判断出来ないなぁ
仮に本当だとしたら俺はレミィを裏切ることになるけど
嘘だった場合一気に人間不信になるな」
レミリア「どうなの？返信を聞きたのだけど」
鋤羅「あぁごめんちょっと考え事しててな
(でもこれが嘘だとした場合レミィが俺を裏切ることになるからこれは本当なのか嫌でもレミィならやりかねない)」
レミリア「(鋤羅エイプリルフールだからって私のこと疑っているのかしら？そりゃ確かに今日言ったら疑うのはわかるけど私か鋤羅を裏切るようなマネ出来ないわよ)」
レミリア・鋤羅「「(どうしよう・・・)」」
天子「鋤羅何考え込んでるのよ？
レミリア様がそんな鋤羅を裏切るようなことするわけないじゃない」
鋤羅「そうだよな」
レミリア「(天子ナイス)」
鋤羅「(いやでも待てよレミリアと天子がグルという可能性も否定出来ない天子は最近俺と距離を置きながらレミィと何かを話していたから今日の事なのかもしれないし)」
天子「鋤羅再び何考え込んでるのよ私とレミリア様がグルだとでも思ってるの？
そんなわけないじゃない」
鋤羅「(天子はこう言っているがそれが嘘という可能性がある)」

天子「(鋤羅エイプリルフールだからって疑心暗鬼になり過ぎよレミリア様が泣いたらどうするのよ
ほらもう涙目になってるし)」
鋤羅「(やばいレミィがもう泣きそうだここまで来ると本当なのかもしれないいやでもこれも全て演技だという可能性もあるレミィの演技は見たことないが演技が上手いのかもしれない)」
レミリア「(私がここまで涙目になってるのに鋤羅まだ私と天子を疑うの?)」
天子「(早く決断しなさいよねレミリア様が泣きだすと面倒くさいのだから)」
鋤羅(ってか誰も喋らないから全員無言状態じゃねーかどうすんだよ)
フラン「お姉様何で鋤羅を騙すような真似してるの?」
レミリア「フ、フラン何を言ってるの?私はただ鋤羅と結婚半年祝い買いに行きたいだけよ」
フラン「それはおかしくない?
だって普通1年とかだったら買いに行く物だと思うけど」
鋤羅「(フランの言うことも一理あるしレミィの言うことも嘘と断定出来ない)」
フラン「お姉様の必死さを見る限り怪しいよ」
レミリア「そ、それは」
鋤羅「(恐らくこの必死さは俺に本当だと思わせる行為なのかもしれないだとしたらフランもグルで3対1で圧倒的に不利だな)」
天子「あのさ・・・この際だから言うけどさ何で素直に行こうとしないの?仮に嘘でも半年なんだから良いじゃない」
鋤羅「はぁわかったよ行くよ行けば良いんでしょ?
レミィ行くから準備しろよてか俺とレミィの部屋は合併したんだったな」
~少年、少女準備中~
繁華街にて
鋤羅「基本的に何買うの?」

レミリア「お互い相手の好きそうなものを探して買うの」
鋤羅「まぁそれが妥当だよな」
～鋤羅サイド～
鋤羅「う～んレミィの好きなものか
何だろうなあいつと最近普通の夫婦生活みたいなことしてるから
わかんないな」
～レミリアサイド～
レミリア「鋤羅の好きなものなんか簡単よでも見つけるのが大変
ね」
～鋤羅サイド～
鋤羅「これでいいかな？
あいつならダイヤモンドのペンダントなんかプレゼントされたら
失神しそうだしなこれにしよう」
～レミリアサイド～
レミリア「これなんか良さそうね有名なメーカのヘッドホン
鋤羅最近ヘッドホン無くしたなんて言ってたしね」
～少年、少女合流中～
鋤羅「ちゃんと買ったか？」
レミリア「もちろんよ
せーの」
鋤羅「これ俺の欲しかったメーカのヘッドホンじゃないか探すの大
変だっただろ？」
レミリア「鋤羅こそこんな高価なものどうやって買ったの？」
鋤羅「お金ならちゃんと沢山貯めておいたからな問題ない」
レミリア「そう、そのヘッドホンね実は鋤羅の検索履歴を見てどこ
に売ってあるから特定しておいたのよ」
鋤羅「そうかじゃあ帰るか」
レミリア「そうしましょう♪」
ー終わりー
いや～エイプリルフールですね
→もう終わったわアホ主

まぁ久しぶりの投稿ですけど楽しんでいただけたら幸いです
やっと部活と勉強もゆったりして来たので投稿頻度増えるかもですね
それでは

番外編＃1

鋤羅「今回の合計点数は・・・
５００点満点中４９７点か」
友人Ａ「お前すげぇよなテストいつも首席だし」
友人Ｂ「２番の俺なんて４６８点だぜどうしたらそんな点数取れるんだよ？」
鋤羅「さぁな適当にやってたら取れた」
友人Ａ「その適当で取れるあたり人じゃなくね？」
友人Ｃ「そういえば今日隣のＢクラスに転校生来るんだろ？」
鋤羅「へぇ～そなのか」
友人Ａ「なんでもそいつここの入試で３００点中２９９点取ったらしいぜ」
鋤羅「まじかよ俺でも２９７点だったのに」
隣のクラスの人「すいません鋤羅さんですか？
私のクラスの転校生が呼んでるんので来てもらえますか？」
鋤羅「別に構わない」
～少年移動中～
さとり「あなたが鋤羅さんですか？
私はＢクラス首席の古明地さとりです」
鋤羅「Ａクラス首席の栞曩鋤羅（しおさきすきら）だ
（きれいな人だな）
それで用とはなんですか？」
さとり「あなたはこの学年でもとても成績が良いと聞きますそれで高校で同じクラスになるように先生に掛け合ってくれませんか」
鋤羅「それは俺とテストの点数を競いたいと言う解釈で構わないか？」
さとり「むしろそう受け取ってください」
鋤羅「わかった
俺は成績が良いから大体の頼みなら先生は受け入れてくれるさ」
～職員室～

鋤羅「慧音先生居ますか～？」
慧音「どうした？」
鋤羅「４月からこの学校の高校生になる時にさとりと俺を同じクラスに出来ますか？」
慧音「出来るがどうしてだ？
もうしかして一目惚れとかしたか？」
鋤羅「そんなんじゃありませんよ（確かに可愛いけど）
さとりとテストの点数を競いたいからです」
慧音「わかったじゃあ手配しておくよ」
～春休みが終わり４月～
鋤羅「あった俺はまたＡクラスか
ということは」
さとり「私もＡクラスです
そういえば高校最初のテストが今日でしたね結果を期待してますよ」
～教室～
慧音「とりあえずみんな高校に進級おめでとう
この学校の高校は全部で１９回テストを行い一番点数の高いものは１５００点満点のテストもある
低くても７００点満点だ
ちなみに今回のテストは１２００点満点だ
ではテストを頑張ってくれ」
妹紅「おーいテスト始まるから先につけ監督は私だ」

妹紅「では始め
（慧音から聞いていたが注目すべき生徒はさとりと鋤羅といってたな
採点は確かに私だがまぁいい点数が楽しまだな）」
～９０分後～
妹紅「じゃあ回収する
このテストは私が採点して慧音を通して返してもらえ
では解散だ」

～妹紅採点中～
妹紅「鋤羅とさとりだったか
この二人点数がとてもいいな慧音の言ってた意味ってこういうことか」
慧音「妹紅採点終わった？」
妹紅「今終わったこの二人すごいな」
慧音「鋤羅は中学頃すごかったし
さとりはここの入試を３００点中２９９点取ってたからね」
～教室～
慧音「テスト返すぞ」
ーーテスト返却中ーー
クラスメイトＡ「じゃあさとりＶＳ鋤羅だな
ここまで必ず満点から１０点以上失ったことのない皇帝と
入試を２９９点で入った女王
じゃあ鋤羅から」
鋤羅「１１９７点ださとりは」
さとり「さすがですねと言いたいところですが残念です私は１１９８点です」
クラスメイトＢ「おぉすげぇ女王が皇帝退けたぞ」
鋤羅「今回は負けたが次はその座を取り返すからな」
さとり「えぇ楽しみにしています」
ーー終わりーー
いや花粉がひどいですね
→人によっては違うだろ
これは本編とは全く関係ない話ですまぁ鋤羅の高校時代ぐらい考えてください
それとこの番外編ですが投稿するペースは不定期です
本編の投稿が飽きたら投稿するみたいな感じです
→本編飽きるとかダメだろ
それでは

細菌の塊と病弱夫婦（？）

レミリア「ハクション」
鋤羅「どうした？レミィ花粉症だっけ？」
レミリア「違うわよ多分風邪よ」
鋤羅「そうか？」
スッ…（レミリアのおでこにてを当てる」
鋤羅「熱っこれは異常だぜ」
レミリア「さっき測ったら３９．５度あったわ」
鋤羅「病院行く？」
レミリア「いいわよどうせ私は吸血鬼よ
すぐ治るわ」
ーー数日後ーー
鋤羅「絶対変だよ３日経っても治らないなんて
俺なら３日あれば治るのに」
レミリア「・・・（辛いこんなのもう嫌）
鋤羅この私を今ここで殺して」
鋤羅「は？何言ってんだよ
レミィのことなんか殺せるわけないだろ」
レミリア「もう私は辛くて生きていけない
そもそも吸血鬼と人間が結婚すること自体がおかしいのよ」
鋤羅「・・・レミィなが俺の事をどう思うかはどうでもいい
でもなこの世に生まれる権利をそんな簡単に放棄しないでくれ」
レミリア「鋤羅にはこの辛さわからなわよ」
鋤羅「わかるよ俺はこっちの世界（幻想郷）に来る前数えきれない
くらい風邪になった」
レミリア「数えきれないくらい辛さを味わったの？」
鋤羅「うん
だから安心しろ絶対に治してやるから
とりあえずこの薬飲んで」
レミリア「何この薬？」

鋤羅「あっちの世界から持ってきた薬だあっちには優秀な医者が多いからな」
レミリア「・・・（私が怒ったのに鋤羅は必死に私の事を大事にしてくれる）
どうして怒った私を大事にするの？」
鋤羅「自分の嫁を大事にするのに理由は必要？」
レミリア「・・・！（私がただ自分だけが辛いと勘違いしていただけ
鋤羅は何回もこれを経験している」
鋤羅「それにしても吸血鬼のレミィが治らないのはおかしいな何か別の場所で間接的又は遠くから菌を操っているかのどちらかだろうな
でも菌はそんなに空中に長時間居られないからそこら辺にいるんだろ？」
細菌の塊「さすがだな存在に気付くとは」
鋤羅「存在に気づいてはいないさまぁこの状況下でならそれが有力だと仮設した場合を述べたらドンピシャだっただけ」
細菌の塊「気づかれたら仕方ないお前も病気になれ」
鋤羅「・・・くっ辛い・・だけど
お前はレミィを3日に渡り苦しめ続けたその代償はでかいぞ
紅蓮『炎神脚』
!?攻撃が通じない？」
細菌の塊「俺は粉みたいものだ打撃とか斬撃が効くわけないだろ」
鋤羅「じゃあそれ以外は効くんだな
灼熱『跳躍火炎弾』」
細菌の塊「遠隔攻撃か面白いがそれも効かない」
鋤羅「天子ーいるかー」
天子「どうしたの？大声出して」
鋤羅「天子の非想の剣貸してくれない？」
天子「いいわよ。はい」
細菌の塊「言っただろう斬撃は効かないと」

鋤羅「非想の剣で切られた奴はどうなるか説明してやれ」
天子「非想の剣で切りつけられたものは実際当たっていなくても切られた痛みは残るのよ」
鋤羅「という事でさよなら」
細菌の塊「痛みが残るだけで・・・」
鋤羅「あぁもう、うるさいから雷で抹消したわｗｗ」
天子「最初からそうすればよかったのに」
鋤羅「出来るだけこいつから情報を吐かせてからの方がいいかなと」
天子「まぁそうね情報無しじゃ不利ね」
鋤羅「レミィ少しは楽になったか？」
レミリア「いえ完全に回復したわ」
鋤羅「でも病み上がりだから明日までは安静にしろよ」
レミリア「じゃあ鋤羅一緒に寝て♪」
鋤羅「天子ごめん今日はもう席を外してもらっていい？」
天子「うんそうさせて貰うわ」
鋤羅「・・・もうレミィ寝てるし
まぁレミィの看病くらいはしてあげるか」

ーー終わりーー
なんか前にもあったような半ば強引に終わらせた感があります
次回は多分番外編です（でも本編投稿するかも）
それでは

番外編＃2

ーー登校中ーー
さとり「おはようございます鋤羅さん」
鋤羅「おはようさとり」
さとり「きょうはたしか７００点満点のテストでしたね」
鋤羅「あれ、きょうだっけ？」
さとり「何で知らないんですか？
今回も私が勝ってしまうじゃないですか」
鋤羅「それでも俺は勝てるんだな～」
さとり「まともに勉強してないのに勝てるんですか？」
鋤羅「まともに勉強してなかったら前回１１９７点なんてとれないだろ」
さとり「テスト前だけまともに勉強しているのかと思いましたよ」
鋤羅「そんなわけないだろ」
ーー教室ーー
慧音「きょうはテストの前に学級委員長と副委員長を決めてくれと指示があった
けど時間がないそこで鋤羅とさとりにやってもらいたいんだが構わないか？」
鋤羅「べつに俺は構いませんよ」
さとり「私もです」
慧音「わかったどっちが学級委員長をやるかわ放課後伝えに来てくれ
ではテストを始めるから準備しとけ」
ーーテスト前ーー
妹紅「どういうわけかまた私がここのテスト監督と採点をすることになった
まぁ任されたからにはちゃんとやり遂げるから不正行為した奴は即指導部行きだ
じゃテストを配る」

ーー5分後ーー
妹紅「チャイムが鳴ったな
じゃあ始め
（今回も鋤羅とさとりが主席と2番を独占するな
まぁ私のクラスじゃないからどうでもいいが来年この二人を持ってみたいな）」
ーー70分後ーー
妹紅「じゃあ回収だ
今回も採点は私だが返すのも私だ
慧音は用事でいないからな」
妹紅「今回もあの二人か・・・」
慧音「妹紅どうしたの？」
妹紅「慧音まだいってなかったのか
いや鋤羅とさとりがこんなに点数とれて他の奴はダメとは言わないが二人に比べて低いのかなと思っただけさ
時間がないんだろ早く行ってきなよ」
慧音「じゃあ行ってくるわ」
ーーそのころ教室ではーー
にとり「鋤羅今回のテストどうだった？」
鋤羅「ん？まぁ割かし簡単だったかな
さとりはどうだった？」
さとり「あんなの苦戦するにも値しませんよ」
鋤羅「まぁ今回は俺が皇帝に返り咲くけどな」
さとり「そんな簡単に私から主席の座は奪えませんよ
今回も私が主席です」
椛「二人の結果が楽しみですね」
天子「何で自分の結果よりもこの二人の結果の方が楽しみなんだろ？」
アリス「自分達が主席と2番取れないからじゃない？」
布都「くやしいが多分そうじゃな」
早苗「人間って何でこう出来不出来がはっきりすんでしょうね」

妹紅「全員いるかテストの答案を返す
最高点の点数は」
さとり「先生ここではそれは言わないお約束なんですよ」
妹紅「そうか・・・
平均点は言っても良いか？」
さとり「平均点なら構いませんよ」
妹紅「じゃあ最高点は秘密ということで
平均点は５７８．２３点だちなみに学年一位だ
慧音のクラスは優秀だな」
ーーテスト返却中ーー
妹紅「テストの点数で盛り上がるのは構わないが放課後にしてくれ」
ーーＨＲ中ーー
妹紅「連絡事項は以上だあと鋤羅とさとり決まったらでいいから放課後にきてくて
役員の件で話を聞いておきたい
それじゃ解散」
ミスティア「じゃあ前回主席のさとり女王から点数の発表をどうぞ」
さとり「６９９点ですもうあなたに勝ち目はないに等しいですよ」
ミスティア「念のため鋤羅さん点数を発表してください」
鋤羅「残念だったなさとり俺は７００点。満点だ！」
さとり「!?満点・・・
さすがですね」
にとり「鋤羅が皇帝に返り咲いた」
さとり「さすがですねでも次の１０００点満点のテストではもう一度その座を退いてもらいますよ」
鋤羅「そう簡単にいかないぜ中学のころからここの学年の皇帝は俺だったからな」
さとり「望むとことです」
ーー終わりーー

いやーやっと投稿できました
あとこれ初のパソコンで投稿してみました
部活の大会地近いのでしばら休止いたします
→唐突だなおい

竜の構え

レミリア「ねぇ鋤羅昨日出来た怪しい店あるじゃない？」
鋤羅「あぁあのなんか不気味な店だろ？
俺的にあそこあんまり好まないんだけど」
レミリア「いいじゃない行くだけ行きましょ」
鋤羅「行ってなんか起きたらどうすんだよ」
レミリア「その時は鋤羅がなんとかしてくれるでしょ♪」
鋤羅「出来る範囲ならするけど俺の手に負えなかったら？」
レミリア「そんな事滅多にないし大丈夫よ」
～少年、少女移動中～
レミリア「ついたわね・・・」
鋤羅「いかにもなんかありますって感じじゃん」
ギィ…（扉を開ける音）
レミリア「店なのに店主どころか店員もいない？」
鋤羅「あっ、営業停止って書いてある
じゃ帰るか」
レミリア「待ちなさい多分この店から今は出られないわ
化かされているわ」
鋤羅「いつのまに？」
???「凄いなそこの嬢ちゃんすぐ気付くなんて」
鋤羅「いつからそこにいた？」
???「いきなり剣を向けるとはいいでしょうこの先の地下室に来なさいそこで闘ってあげます」
～少年、少女移動中～
レミリア「神槍『スピア・ザ・グングニル』」
鋤羅「稲妻『雷神脚』」
???「あなた達行動が遅いですね」
レミリア「今よ妖夢」
妖夢「人符『現世斬』」
???「いつの間に！」

鋤羅「え？いつからいたの？」
妖夢「レミリアさんに呼ばれて護衛をしてました」
鋤羅「そ、そうか」
???「もういいです
奥の手を使いましょうか
領域『絶対閉鎖』」
鋤羅「なんだこれは？」
???「今この空間の中に新たに小さな空間を作ったそして小さな空間には外から干渉できない
つまり俺とあんたの1対1だ」
鋤羅「俺にサシで勝負を挑むとはいい度胸だな」
〜死闘三時間後〜
鋤羅「くっなんで攻撃が当たらない」
???「なんだもう終わりか？」
鋤羅「・・・本当は嫌だが使うしかないか」
スッ…（鋤羅は地面に手を添える）
???「なんだその構えは」
レミリア「あの構えは・・・！」
妖夢「どうしたんですか？」
レミリア「この勝負鋤羅の勝ちよ」
妖夢「あの状況から逆転するんですか？
いくら鋤羅さんでもそれは不可能なんじゃ」
レミリア「普通だったらね
鋤羅の竜（ドラゴン）の構えが出たら一気に戦況はひっくり返る
鋤羅あの構えはそれほど強大な力を持っているの」
鋤羅「ガアッ」
???「なっ？こいつ急に早くなった」
鋤羅「グカアアアアアッ」
???「炎と雷のブレス!?」
鋤羅「グギャアアアアア」
???「いつの間に後ろに」

鋤羅「ゴガァァァァァ」
???「ぐあっ
くらえ魔法『水泡爆砕』
え？消えた？」
鋤羅「グゴァァァァァ」
???「声はするがどこだ」
鋤羅「ガァァァァァァァァ」
???「があ
上だと・・・
また消えた厄介だな仕方ない
絶対防御『水泡防御壁』
鋤羅「ガァァァァァァァァァーーーーーー」
バギィ…（防御壁が割れる音）
???「まず・・・」
鋤羅「グガァァァァァァァァァ」
ドサッ（???と鋤羅の倒れる音）
妖夢「ちょっとこれ引き分けなのでは？」
レミリア「いいえ完全に鋤羅の勝利や相手は死んじゃってるけど鋤羅は力を使い果たして眠っているだけよとりあえず紅魔館まで運びましょうか」
～少女移動中～
鋤羅「ん～痛っ
なんだこれは全身が痛い」
レミリア「まだ起きちゃダメよ
安静にしてなさい
全く竜の構えはあれほど使わないでって言ったのに」
鋤羅「ごめんごめん絶望的な状況だったから」
レミリア「どうせもう一回竜の構えで私のことを惚れさせようとでも考えたんでしょ」
鋤羅「レミィにはやっぱりバレるか」
レミリア「使わなくても私は鋤羅のことを愛してるわよ」

鋤羅「ありがとう」
レミリア「なんのことよ？」
鋤羅「別に～」
レミリア「あらそう
でも三日間は戦闘不能ね」
鋤羅「やっぱり竜の構えの代償でかいな」
レミリア「全くよ本物の竜になったらどうするの？」
鋤羅「今後は控えるよ」
ーー終わりーー
ふぅーやっと少し時間が出来たので書きました
鋤羅が竜になるのか・・・
→自分で考えた設定だろ
楽しんでいただいたら嬉しいです

友人からのリクエスト

埜遡☒「なぁ霊夢将来的に結婚とか考えてる？」
霊夢「それなりにはね」
埜遡☒「鋤羅とレミリアはどうなんだろうな」
レミリア「そんなのあんまり考えないようにしてるわ」
霊夢「うわっいつからいたの？」
鋤羅「最初からいたぞ」
埜遡☒「鋤羅かよ気配を消して近づくのやめてくれない」
鋤羅「別に消してるつもりないけど」
霊夢「そういえば結婚とかあんまり考えてないのってなんで？
鋤羅と結婚する気ないの？」
レミリア「鋤羅が私と結婚したいかは鋤羅が決める事だしお互い溺愛レベルまでいってるから結婚前提で付き合ってるしね」
鋤羅「そもそも論結婚する気ないのに付き合う必要あるか？
結婚を考えているから付き合うものなんじゃないか？」
埜遡☒「確かにそうか
そうだな」
レミリア「まぁ結婚後の事は結婚してから考える事だと思うけどね」
妹紅「その場に居ていいから話を聞け
今日をもってみんなはここから旅立つわけだがまぁとりあえずおめでとう
ここから先は就職するやつ進学するやつ色々いると思うがみんなはきっとうまくやっていく私はそう信じている
もちろん辛い事があるかもしれないが耐えれなくなったら私の所まで来いその時はどれだけでも相談に乗ってやるから
改めて卒業おめでとう」
鋤羅「駅前の喫茶店行こうぜ」
レミリア「打ち上げの代わりのね」
霊夢「いいんじゃない」

埜遡☒「よしじゃあ行くか」
～少年、少女移動中～
ーー喫茶店にてーー
レミリア「結局来たはいいけどどうするの？」
鋤羅「まぁ将来的な話をしようぜ」
埜遡☒「じゃあさ鋤羅はさ将来レミリアと結婚するにあたって不安な事ってないの？」
鋤羅「う～ん結婚に関してはないけどレミリアが出産の時に死なないか心配だな」
埜遡☒「それはまぁ俺もあるな」
鋤羅「レミィは特にないだろ？」
レミリア「そうね生涯を貴方と共に居られるのなら文句はないわ」
埜遡☒「出たよバカップル性質」
鋤羅「じゃあお前は違うんだな」
霊夢「え？そうなの？」
埜遡☒「それは俺もそう考えてるけど」
鋤羅「じゃあ変わらないだろ
それじゃそろそろお開きするか」
ーー2年半後同窓会にてーー
鋤羅「あ、埜遡☒、霊夢お久～」
レミリア「久しぶりお二人さん」
霊夢「久しぶり」
埜遡☒「二人も来てたのか」
鋤羅「暇だったしね」
霊夢「もしかして鋤羅とレミリア結婚した？」
鋤羅「あぁこれ？
結婚はしたけど入籍しただけで式は挙げてないんだ」
レミリア「鋤羅たっら私と全然合わずに一生懸命にバイトして指輪買ってくれたのよ
最初は私に対する愛が尽きたのかとか思ったくらいよ」
霊夢「式の費用大丈夫なの？」

鋤羅「なぜか就職した会社が負担してくれた」
埜遡☒「会社で業績上だからじゃね？」
レミリア「私はそう信じてる」
鋤羅「そんな大した事してないんだけどな」
諏訪子「君たちいつも四人でいるよね」
鋤羅「なんだ諏訪子か久しぶり」
諏訪子「久しぶり聞いたよ鋤羅とレミリア入籍したんだって
おめでとう
レミリア鋤羅に振り回されないように気をつけてね」
鋤羅「俺はそんな事しないよ」
諏訪子「本人はこう言ってるけどまぁ振り回されそうになったら私
に言いな鋤羅を教育するから」
鋤羅「しないって言ってるだろ」
諏訪子「はいはい霊夢と埜遡☒は入籍してないのかい？」
埜遡☒「俺と霊夢はまだだな」
諏訪子「ふ～んまぁ結婚式には呼んでよ」
鋤羅「当たり前だろ」
埜遡☒「クラス全員呼ぶから」
ーー1年半後（結婚式当日）ーー
レミリア「まさか予定して居た人がかぶるなんてね」
霊夢「面白くていいじゃない」
埜遡☒「まぁそうだな」
～結婚式後～
鋤羅「はぁ～これで晴れて正真正銘の入籍だな」
諏訪子「いや～おめでたいね同時に二人の結婚式があるなんてね」
妹紅「てかまだお前たち付き合ってたのか何年間付き合ってたんだ
よ」
鋤羅「俺は7年くらいですかね」
霊夢「私は10年くらいね」
妹紅「なんかすごい長い付き合いだな
でも結婚おめでとう」

ーーさらに3年後ーー
埜遡☒「鋤羅いるかー？」
鋤羅「そんな大声で呼ばなくても聞こえるから
また子供たちが本を読みにきたのか？
図書館なら自由に使ってもらってな構わないよ」
霊海「パチュリーさんどこにいるの？」
レミリア「例の図書館にいるわよ」
霊海「レミリアさんありがとう」
霊也「鋤羅さんって強い？」
鋤羅「俺？まぁそれなりにはね」
霊也「じゃあ俺の父さんより強い？」
鋤羅「うんそうだよ」
霊玖「フランちゃんあそぼー」
フラン「あ！霊玖ちゃんだ」
鋤羅「お前達すごいな三人の子供とか」
霊夢「そういう貴方の家庭は四人じゃない」
レミリア「まぁそうね」
鋤羅「レミィを付きっ切りで看病してたからな結構辛かった
いやレミィのためなら全然辛くない」
埜遡☒「俺達の子供前でもバカップル性質は出るんだな」
鋤羅「仕方ないわよお互いそれ以上に好きな人物が存在しないのだから」
鋤羅「確か霊玖が小6で霊也が小5で霊海が小4か？」
霊夢「そうね」
レミリア「私のところは中1と中2が二人ずつね
今四人ともなぜか寮　暮らしだって」
埜遡☒「中学校で寮ってすごいな」
ーー終わりーー
いや～友達が急に作れ言いだすからたまったもんじゃありませんよ
→私情なんて誰もしらねぇよ

夜中編集なので変なとこありかもですそこは許してください
ではまた次の小説で

鋤羅の戦い方

レミリア「まさかのドラゴンなてね…」
こころ「勝てるわけない…」
鋤羅「でも倒さないと先に進めない」
ーー数時間前ーー
鋤羅「なんだこれ？闘技場からの招待状？」
レミリア「面白そうね」
こころ「内容は？」
鋤羅「『我々の用意した敵と戦ってもらう
勝てば賞金が当たるが、途中で負ければ賞金分の金額を払ってもらう』
だって」
レミリア「戦ってもらうって」
こころ「わざわざ参加しなくてもいいんじゃない？」
鋤羅「まぁそうだな」
???「そう言うと思ったよ」
こころ「誰？」
???「この手紙の差出人だよ
まぁ参加しないと思ったよだから金髪の子を幽閉しておいた
参加し私を倒すことができれば返してあげる
それでは」
鋤羅「…まじかよ」
レミリア「これって…」
こころ「強制参加…」
〜少年、少女移動中〜
鋤羅「ここで間違いないな？」
こころ「場所的に間違いないわ」
ーー現在ーー
鋤羅「黒刀『光明滅殺斬』」
レミリア「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

こころ「憑依『喜怒哀楽ポゼッション』」
ドラゴン「ゴガァ」
鋤羅「くっ、ブレスか」
レミリア「水のブレスじゃ鋤羅と相性が悪いわね」
こころ「あの水に帯電させることくらいできないの？」
鋤羅「やってもいいがそれだとあのドラゴンまで帯電状態になって余計戦いにくくなる」
レミリア「じゃあどうするの？」
鋤羅「直接あのドラゴンに攻撃するしかない」
こころ「仕方ないわね」
鋤羅「衰炎『煉獄衰退弾』」
レミリア「紅符『スカーレットシュート』」
こころ「『仮面喪心舞　暗黒能楽』」
ドラゴン「グガァァァァァァァァ」
レミリア「鋤羅…技の応用は完璧ね」
こころ「ドラゴン相手にはまるで効いてないけど」
鋤羅「暴雷『稲妻暴走脚』」
レミリア「いつまにあんなのできるようになったの？」
鋤羅「今作った」
こころ「鋤羅やっぱりあなたバカね」
鋤羅「でもドラゴン様は倒したぜ」
???「ん～最高傑作のドラゴンだったんだがやはりダメか」
鋤羅「早くフランを返せ」
???「まぁ焦るないっただろ？
私を倒せと」
レミリア「天罰『スターオブダビテ』」
???「いきなり攻撃するなよ
極斬『消滅森羅万象斬』」
鋤羅「記憶結合『薙・槍』」
キンッ…（金属音）
レミリア「嘘なんで…」

こころ「あれは…」
レミリア「私の槍とこころの薙刀…」
こころ「どうして鋤羅が持ってるの
違いうそうじゃない
あれは本来一本ずつしか存在しないはず
そして私もレミリア様も今所持しているのに何で？」
鋤羅「悪い、話そうと思ってたんだ
俺の本当の能力（ちから）を」
レミリア「だって鋤羅の能力（ちから）は
炎と雷を纏い・操る程度の能力じゃないの？」
こころ「ちょっとレミリア様の知らないんですか？」
レミリア「ええ…私も知らない」
鋤羅「この能力は
記憶した物質を呼び覚ます程度の能力
簡単に言えば見たことのある物質ならいくらでも出せるってこと
でもこの能力は封印したんだ…」
こころ「どうして？」
鋤羅「この能力（ちから）と同時に炎と雷を纏い・操る程度の能力を発動すると俺の体が膨大な力に耐えきれず制御できずに暴走したから」
レミリア「それじゃ今は制御できてるの？」
鋤羅「いや、も一つの能力を今は発動してないだけだ」
???「死ねーーーー」
鋤羅「ドラァァァァァ」
ザスッ…（???の腹部に鋤羅の左手に持っている薙刀が刺さる音）
ズバッ…（鋤羅の右手に持っている槍が???首を斬るおと）
レミリア「倒した・・・」
鋤羅「ケホッ、ケホッ」
こころ「鋤羅大丈夫なの？」
レミリア「とりあえず紅魔館で休みなさい」

すごい強引だけど今回はここまでにします
二回目のパソコンでの投稿です
楽しんでいただけたら幸いです
あと勝手に鋤羅に腐敗させる程度の能力つけました
→雑だなおい

いざ乗り込み！

鋤羅「うっ、痛た」
こころ「まだ起きちゃだめよ」
鋤羅「いや、起き上がれない」
こころ「は？あなたなに言ってるの？
バカなの？」
鋤羅「辛辣ですね傷つくのでやめてください（棒）
まぁそんなことはどうでもいいとして
多分普段使わないほうの能力を使ったから筋肉が委縮してるんだよ」
レミリア「それって動けるの？」
鋤羅「無理
起き上がることすらできないし」
こころ「どうするのフラン様は誘拐されたままだし
明日また戦わなきゃいけないんでしょ？」
鋤羅「多分明日には１００％じゃなくても７０％には回復してるだろうし」
レミリア「鋤羅の７０％ってどの程度なの」
鋤羅「もう一つの能力が使えないだけ」
こころ「それってもう一つの能力で３０％も消費してるの!?」
鋤羅「そうだけど…」
レミリア「それ結構燃費悪くない？」
鋤羅「それくらい強大な能力なんだよ」
――翌日――
こころ「どう？動けそう？」
鋤羅「おはよう
多分８０％くらいの力なら出せそう」
レミリア「じゃ移動しましょうか」
――少年、少女移動中――
鋤羅「さてここからは未踏破だな

っとさっそくいるな」
こころ「なにもいないじゃない」
鋤羅「見えないだけでいる
そこだな
剣技『彩魔獄炎斬』
ガンッ…
鋤羅「避けたか」
???「あ～あ残念そのまま気づかなければ楽に死ねたのに
気づいたからには楽に死ねな…」
鋤羅「ちょっとそういうのいらないので
雷衰『ライジング・腐敗ゲイボルグ』
じゃ進むか」
こころ「これ…本当に８０％なんですかね」
レミリア「鋤羅そういうならそうなんでしょけど」
鋤羅「鉄扉か…
いっちょ溶かしてみるか
獄炎『煉獄ボルケーノー』
レミリア「溶けないどころか
全く効果ないわね」
こころ「じゃあ破壊できないの」
鋤羅「多分無理だ俺の雷は速いがゆえに威力が炎より劣るんだよ」
ギィ…（扉が開く音）
レミリア「あ、開くんだ」
???「うるさいから開けてあげたんだよ」
こころ「あなた誰？」
座伏鎖「俺は座伏鎖（ざぶさ）だここの家の第６の刺客といったと
ころだ」
レミリア「あら第６刺客って以外と少ないのね」
座伏鎖「勘違いするな
最初にあったのが俺なだけで刺客は１５いるかな」
鋤羅「でも最初に送り込まれたってことは弱いからだろ？」

座伏鎖「番号は単体での話だタッグを組めば第1刺客もお凌ぐ奴もいる」
座伏鎖「お話はここまでだ」
こころ「武器は薙刀…ってことは相手は私ね」
座伏鎖「ほう…お前も薙刀使いか」
こころ「しゃっべている場合？」
キンッ…
鋤羅「あいつ薙刀を使いこなしている」
レミリア「そうねでも技術でいえばこころに勝るものはいない」
座伏鎖「へぇ…なかなかやるね」
こころ「そんな悠長にしてていいのかしら
あなた自分の右手首見てみなさい」
座伏鎖「!?いつの間に」
こころ「あなたは左で薙刀を持っていた
でもなぜかぎこちない動きだった
ってことは右は神経麻痺か何らかの障害があると見たら大当たりね」
座伏鎖「まさか見破られるとは
だがそれがどうした痛みが感じないだけだ」
鋤羅「哀れだな知らないのか
たとえ妖怪であろうと人間であろうが生命体である限りは出血多量の場合死ぬんだぜ」
座伏鎖「何!?」
レミリア「ということで残念ねあなたの負けよ」
???&???「「隙ありーー」」

う～ん最後投稿したのいつだっけ？
覚えてないや
ということで多分本編16話目かな
楽しんでいただけたら幸いです
あと前回の???は偽物です